



特別支援教育における魅力ある授業づくり実践編

障害の重い子どもの見えにくさに配慮した指導

—認知特性に応じた教材の工夫—

実践のポイント

- 見やすい色、形、距離といった見え方についてのアセスメントを行い、個々の児童の見やすい位置や色の実態を把握して、授業づくりに生かしています。

「重複障害児のアセスメント研究」（国立特別支援教育総合研究所）を参考にして事前に見え方のアセスメントを行い、授業に入る教師が個々の児童の見え方を共通理解しました。児童によって教材を提示する高さや距離、方向を変えることで、見やすい環境をつくっています。

- 児童が自分から見たり、触れたりできるように、教材を工夫しています。

素材の色が見やすく、小さな力でも動かすことができることから、風船を使って教材を作成しました。4色の風船を使い、それぞれの色と、音や手触りを結び付けた活動を展開することで、興味がもてるようにしています。

事例について

- 対象学級：小学部肢体不自由重複学級 児童3人（1年男子、3年女子、4年男子）
- 学習集団の実態

3人とも知的障害と肢体不自由を併せ有し、医療的ケアを必要とする児童もいます。1日を通して目をつぶっていることが多い児童、見えにくさのある児童がおり、環境を工夫する必要があります。人と関わるのが好きで、興味・関心があることには意欲的に取り組む児童たちです。

授業実践について

単元名「ふうせん ぶるぶる ふわふわ ぽーん」

- 単元設定の理由

自分の動きによって活動が始まる体験をすることで、因果関係の理解を促すとともに期待感をもたせ、対象物へ視線を向けたり、自分から手を動かしたりしてほしいという願いから、単元を設定しています。単元名も児童たちに分かりやすいように工夫されています。

- 本単元の目標を達成するための3つの観点

- ① 教材の提示の工夫「見えやすい・聞きやすい環境の整備」

背景を黒にし、窓からの光を抑えて視覚刺激を減らしたり、教材を提示するときに注目すべき所をライトで照らすなどして強調したりする。また、自分の出した音が分かるように音を精選する。

- ② 主体的に活動するための教材・教具の工夫

小さな力でも大きく動いたり、はっきりと音が鳴ったりして、自分でできたことが分かるような教材を工夫する。

- ③ 表出への支援

教師間で、児童のどのような行動が何を意図しているのかを共通理解し、児童の小さな行動の意味をくみ取ってフィードバックすることを大切にしている。

指導・支援の実際

○自分から見たり、手を動かしたりするための活動の工夫

導入では、歌いながら風船本体に付けた懐中電灯を一つずつ点けて提示し、活動への期待を高めます。展開では、次の4つの活動を行います。



① みどりのかえる



風船の口にストローを付け、指で押さえたり離したりして、音や風を楽しむ。歌に合わせて音を鳴らすなどして遊び方を広げたり、音を期待して自分から手を動かしたりする姿をねらう。風船を提示する際、言葉掛けをして音を鳴らすことで安心して取り組めるようにする。

② きいろいちょうちょ



空気清浄機の空気によってふわふわと揺れながら浮く風船を見たり、つかまえたりして楽しむ。風船の中に鈴を入れることで、音でも浮いていることを感じられるようにする。見やすい位置にひもを付けた風船を浮かせることで、自分で引っ張ることもねらう。

③ しろいにわとり



自分で持ち手を引っ張り、お湯を入れた風船を転がして膝に落とす活動である。個々の実態に合わせて持ち手の形や素材を変え、自分から引っ張ることができるようにする。一人ずつ順番に行うことで、友達の様子を見たり感じたりすることもできる。

④ あかいロケット



ストローを付けた風船にテグスを通し、音と風を出しながら進むようにする。児童の視線の向きや見やすさに合わせて、近づいてくる方向や高さを調節する。児童の間にテグスを張り、児童から児童へロケットが行き来するようにして、友達にも視線が向けられるようにしている。

どの活動の中でも、教材を見やすい位置や姿勢の工夫、児童の動きに応じた言葉掛けがされています。指が意図的に動かせる児童には、スマートフォンで音楽を流す係を与えて、動きを促すとともに集中や期待感を高めています。

児童の表れ

○ 見る力の向上

これまであまり見えていないと思われていた児童に対し、見え方のアセスメントを行い、見やすい環境を整えることで、自分から目を開いたり、物を見ようとしたりすることができるようになりました。

○ 自分からの動きや表出

授業中寝てしまうことがあった児童が、好きな音やできる動きを取り入れることで、風船の空気が抜ける音を聞いて笑ったり、何度も風船に視線を向けたりして、意欲的に活動することができるようになりました。授業に入るどの教師も同じ働き掛けをすることで、自分から手を動かす姿も見られるようになりました。発語がある児童は、教師に「もう一回やる」と言ったり、はっきりと声を出して歌を歌ったりして、自分からやりたい気持ちを表すことができました。